

佐藤友紀(著)

「パリス・アプローチ 腰、骨盤編—評価と適応」

内山 靖
(名古屋大学)

このたび、佐藤友紀氏の単著による「パリス・アプローチ 腰、骨盤編—評価と適応」が発刊されました。全 225 ページにわたる学術的専門書を 1 人で執筆することは、内容の一貫性や整合性を保つ上で優れる一方で、それに必要なエネルギーや労力は並大抵ではありません。この点から、まずもって率直に敬意を表するものです。

運動療法の歴史は古く、治療の語源が“手当て”や“癒し”であることから理解できるように、人が人に働きかけることの基本は徒手的アプローチであり、言語的・非言語的なコミュニケーションが存在することは自明です。徒手療法は manual therapy の訳語ですが、そこには器用な指先による技術を超えた何かが存在しています。最近の徒手療法では、hands-off, bio-psycho-social モデルが強調されていますが、ある意味での原点回帰と理解しています。

本書は大きく IV 章から構成されています。第 I 章は、「パリス・アプローチではこう診療を進める」と題して、特にはじめの 4 ページで、本書を通して伝えたい結論を明確に示しています。その後、評価、用語の説明、手技の紹介があり、II 章では「症候群と管理」、III 章では「仙腸関節・疼痛と徒手療法」、そして IV 章には書籍によっては冒頭に位置する「徒手療法の歴史」が書かれています。この構成を含めて、本書は、いわ

ゆる特定の手技を啓発するための指南書ではなく、パリスコンセプトを通した解剖・運動学的な基盤に基づいた理学療法推論の重要性を説き、疼痛を惹起している機能不全に焦点を当てた評価と治療を強調した実践理学療法の哲学書を思わせます。ただし、抽象的な思いを綴っているものではなく、特筆すべきは豊富な図表と参考文献にあります。内容に直結する 50 の組織標本と 11 の画像所見を含めて図表は 237 に及び、参考文献はすべて外国語文献で 529 編を数えます。批判的吟味を歓迎する事実の提示と表現には、筆者の強い決意を感じることでしょう。

なお、本書は初版でもあり今後の展開に期待する点も少なくありません。まず、解剖・運動学、手技、効果に関する文献考証が併記されているため、それぞれを深く学ぶには不足を感じます。また、これらをつなぐリーディングを示すフローチャートや具体的な記述がないことから、思考過程を視覚的に示す工夫が必要だと思います。制作上の点からは、患部の観察や触診部位がイラスト表示のため、臨場感に乏しく、また一部に正確さを欠いています。細かい点ですが、図表の仕分けと通し番号に不整合な箇所を散見します。

パリス自身ならびに筆者を知る者として幾分厳しい指摘もしましたが、本書に対する期待が高いため書評とご理解ください。

対象者を前に、よりよい治療・介入方法を模索する多くの臨床家に光明を与える原石として多くの読者が手に取られ、真摯な批判的吟味によってこの領域がさらに発展していくことを期待してやみません。

●B5 判・234 頁・2 色刷
定価 5,250 円(本体 5,000 円+税 5%)
2009 年 文光堂・刊